



浦島伝説研究：
絵本との比較を通して(二〇一〇年度卒業論文要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 板井, 彩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007387

浦島伝説の全容を記す最古の文献は『丹後国風土記』逸文だが、現代の子ども達が浦島伝説を知る方法の一つは絵本である。浦島伝説の研究は近世までの古典が中心で、絵本は取り上げられていない。本研究では、どの絵本にも見られ永く受け継がれてきた浦島伝説の要素と、教科書での扱われ方を明らかにした。

まず、明治1、大正1、昭和23、平成16、出版年不明5の計53の絵本の内容を、御伽草子を含む古典7作品とも比較しながら詳しく見たところ、話の骨子である「浦島太郎」が「竜宮」へ行き、「乙姫」から「玉手箱」をもらい帰郷する点は、名称を含め全ての絵本に見られた。それ以外に、多くの絵本（41作品）は帰郷の動機を「望郷の念」とし、その内36作品に親を思う気持ちが見られた。『風土記』以来の変らぬ要素と言える。また、「玉手箱」を開けても老いて死なず、背中に羽が生え乙姫と昇天する絵本が一例あった。作者は御伽草子の鶴亀を踏まえたと言うが、乙姫が上空へ去る点は『風土記』と共通する。絵本で付加された新しい要素も、元の要素と通じているのである。

教科書では明治から掲載され、平成二十三年度版小学校国語科では全五社が本伝説を扱う。第一学年で挿絵のみを掲載するのは従来通りだが、高学年では漢字学習や説明文に見られ、御伽草子本文を掲載するなど、本伝説を扱う教材が増加している。